

二日月の秋人謡謡謡

二日月興行

河庄

古のやまらう 樽下
牛古鞆太夫
おきぬ申せ

四の橋跡

交樂座

擊送



二日月の人の形浄瑠璃

——演出總形人・線味三・夫太——

(部　　の　　夜)

假名手 紙屋 假名手

本忠臣藏
 道行旅路嫁入の段
 治兵衛
 河庄内の段
 本忠臣藏
 山科閑居の段

(部 の 畫)

八陣
雙蝶々
景事里

二	引	曲	正	浪	二	守
人	窓	輪	清	速	條	護
禿		日	本	入	城	
の	の	記	城	江	酒	城
色			の	の	之	
段	段		段	段	段	

一等御座席
一等椅子席
は五日前より
前賣切符發賣致し居ます

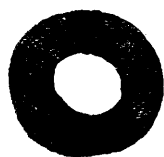
前賣切符専用電話
南⁽⁷⁵⁾四七壹壹番
一般御用の電話
南⁽⁷⁵⁾三〇三二番
三七八八番

三二	一	三二	一
等	等	等	等
席	席	席	席
階	座	階	座
六	三	五	二
圓	圓	圓	圓
十	十	十	十
五	五	五	五
錢	錢	錢	錢
上	上	上	上
リ	リ	リ	リ

(各等入場税別)

●御觀覽料●

昭和十九年二月一日 初日
初日 晝十一時・夜四時 二部
毎日 晝十二時・夜五時 開演



【畫の部】

八陣守護城

二條城毒酒の段

二條城毒酒の段
浪速入江の段
正清本城の段

人形役割

加藤正清
森三左衛門
吉田玉助
吉田玉助

切 次 中
野竹鶴竹鶴竹豊豊豊竹
澤本澤本澤澤本澤竹澤本
吉相重住叶友濱新司團隅
五生太 太 太 太 三太伊若
郎夫造夫郎平夫郎夫三夫

今日歌舞伎で演ぜられる「八陣」は文化四年九月興行の操り淨瑠璃「八陣守護城」其の原作、作者は中村漁岸佐竹藤太。「厭蝕太平記」によつて加藤清正を忠臣とする豊臣家の没落を書いたもので、家康の爲に清正が毒殺された條りであります。さかいを北條にもつてゐて、主要人物は凡て別名で表はされてゐます。仍ち森三左衛門は池田三左衛門、兒島政次郎は後藤又兵衛、佐々木高綱は眞田幸村、大内は島津、主計之助清郷は加藤忠廣、時

iii

人形役割

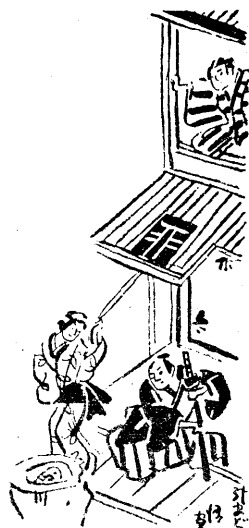
早淵 當馬 吉田兵次
 鞠川 玄番 吉田多三郎
 忍 び頭 吉田常次
 船頭 大ぜい
 正清 本城の段 切竹本大隅太夫
 豊澤清八

加藤正清 吉田玉助
 妻 葉末 桐竹紋太郎
 大内義弘 桐竹政龜
 妻 桐竹紋司
 加藤主計之助 桐竹紋昇
 鞠川 玄番 吉田多三郎
 後島又兵衛 吉田玉市
 忍 び 吉田常次



双蝶々曲輪日記

引窓の段



引窓の段

切

野竹豊竹
澤本澤本
吉相重住
五生太
郎夫造

人形役割割

三平 南 お 與 濡
原岡 方 兵 髪
傳丹 十 衛 長
造平 次 の 五
衛 兵 母 郎
早 郎
吉 桐 吉 桐
田 田 田 竹
玉 光 榮 小 門
德男 造松 郎 吉 造

本曲は寛延二年七月（二四〇九）竹本座上場。竹田出雲、三好松洛、並木千柳合作で全九段からなる。大阪の關取濡髪長五郎は舊主山崎與五郎とその戀人吾妻の爲に盡し、遂に平岡三原等の武士を殺すはめになる。長五郎と仲の悪るかつた放駒長吉は妹お關の意見で長五郎と和解し、長五郎を河内の母方へ落とす。長五郎の母の義理の伴南與兵衛（南方十次兵衛）は捕手の役人だつたが、母の心を察して、長五郎を逃すと云ふ筋で、かの近松作「壽の門松」（享保三年正月〓二三七八〓竹本座上場）と西澤一風、田中千柳合作「昔米萬石通」（享保十年正月〓二三八五〓豊竹座上場）とを併せて趣向を立てたもの。尙、第二相撲の場、第四米屋の場、第六橋本の場と共にこの第八引窓の場が有名である。

梗概

當時浪華に知られた關取に、濡髪の長五郎と云ふのが居たが、長五郎はかね／＼山崎與次兵衛には一ト方ならぬ恩誼をうけてゐたので、その若旦那與五郎が、藤屋の吾妻を身請けするに就いては双肌ぬいで奔走を續けてゐた。

處が吾妻には、郷右衛門と云ふ武士も執心で、此の方にも身請け話を持ち上つてゐたが、それには放駒の長吉と云ふ關取が肩を入れてゐた。

折も折、土俵の顔合せが濡髪と放駒と云ふことになつた。互ひに人氣相撲のこととて、双方の眞の聲援はもの凄く、小屋も割れんばかりの盛況であつたが、此の晴の勝負に濡髪は、態と相撲を

振つてやつたのだ。それは云ふまでもなく、吾妻のことを放駒に宜しく頼みたい爲であつた。

だが、勝ち誇つた放駒は、一向そ知らぬ顔であるのだ。二人の間は喧嘩になつて、遂には茶碗の礫が飛んだ。

性來喧嘩好きの放駒は、茶碗のかたをつけると云つて、濡髪を我が家へ呼び寄せて喧嘩をしかけたが、放駒の喧嘩好きを心配してゐる姉のお關は講中の衆を頼んで長吉に盗人の汚名をつけ、不心得を意見した。

又長五郎も、共々意見をするので、始めて長吉の心も和ぎ、此處に濡髪と放駒は、目出度く和解して、改めて腕の血をすり合ふ仲になつた。

景事里さと 景け 色しき

二人禿の段

本曲は今度新しく西亭により作詞作曲され、初めて文樂座の舞臺に上場される事となつた所作事で、上の巻濱千鳥、下の巻二人禿の全二景からなり、振付は小村若榮がこれに當つた美しく賑やかな新曲である。



二人禿の段

禿 竹本叶太夫

禿 竹本源太夫

竹本八十太夫

竹本隅若太夫

豊竹千駒太夫

(床本) 二人禿

春風に、うかれ／＼て花の里、かむろ／＼と、
澤山そふに、言ふておくれな、エ、うきの里、そ
とでなぶられ、内ではせかれ、ほんに身もよも内
證の、文の使ひの二度三度、いつが春やう、花ぢ
やら、朝の六ツから、上衣下衣引重ね、禿は袖の

人形役割

禿 禿

吉田光造	桐竹龜松	(野澤八吉三造郎)	鶴澤寛弘	豊澤仙松	(豊澤新團三郎)	(野澤八吉五造郎)	(豊澤寛仙治郎)
------	------	-----------	------	------	----------	-----------	----------

ふり初め、つくつくつくには羽をつく、二二三
 四、五重に、七重に、琴は三十三四十五、二十三
 夜の月さま、ついた、てんまでついた、エ、つい
 たえ、てん／＼手まりの、糸さま、可愛い、京で
 一番糸屋の娘、二番よいのは、人形屋の娘、三で
 よいのは酒屋の娘、きりようが良ふて、京で一番
 大阪で二番、さがで三番、吉野で四番、御所で
 五番のいとさん見れば、立てば芍薬、座れば牡丹
 歩く姿は百合の姿、咲いた／＼、咲いた櫻になぜ
 胸繋ぐ、氣もつ風さへ、よぎて吹く、花も可愛か
 手折もせまい、かわい小櫻糸櫻、かむろは室の初
 櫻、散るは吉野の小櫻、さて面白い花の里、心ご
 ころで楽しまん。



道行旅路の嫁入の段

【夜の部】

假名手本忠臣藏

道行旅路の嫁入の段

九段目山科閑居の場を逆に使つた行き方のもので、普

通歌舞伎でも「假名手本忠臣藏」(寛延元年||二四〇八

||)八月竹本座初演。全十一段で竹田出雲、三好松洛、

並木千柳合作)の第八段目「道行旅路の嫁入」と續けて

出す事が多い。

娘 小浪 竹本 伊達太夫

妻 戸無瀬 竹本 呂南部太夫

ッ

竹本 津磨太夫

竹本 隅若太夫

竹本 津磨太夫

梗概

若狹之助は本藏に向つて、師直に怨みあれば、

唯一刀と存ぜしに、汝が金銀を以て媚諂ひし故討

洩らし、我は詔ひ武士と殿中一杯の取沙汰、其方

は我れを騙つたなと云つて死罪を申渡します。若

野鶴
澤澤
松友
之衛
助門

狹之助は自ら庭へ下り、太刀振下して、伴左衛門

鶴
湮
燕
三

を斬り、返す刀で本藏の縄を切解きます。若狹之

野
澤
勝
太
郎

べ、本藏は臺子の秘密を語りて主君の武運を喜び

野鶴
澤澤
松友
之衛
輔門

ます。若狹之助は虚無僧の編笠尺八袈裟を餞別に

豐澤猿二郎

與へ、妹の禮に師直が屋敷の圖面を取らせて、大

星方へ土産にせよと云ひます。

人形役 割

哀別の涙を呑んで行く本藏の後姿を見送る若狹

之助の眼にも涙が浮んでゐます。

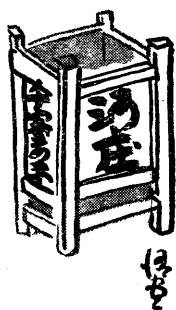
戸
無
瀬
桐
竹
紋
十
郎

娘 小 浪 吉 田 榮 三 郎

之助の眼にも涙が浮んでゐます。

紙屋治兵衛

北新地河庄の段



北新地河庄の段

中竹本重太夫

豊澤廣助

切豊竹古靱太夫

鶴澤清六

この淨瑠璃は文豪近松門左衛門が一代の傑作といはれる名作で、享保五年十月十五日の明方大阪綱島大長寺で情死をした小春治兵衛の件をすぐさま脚色して十二月六日初日で竹本座にかけたもので、心中の白眉とされて居ます。

梗概

紙屋治兵衛は舅五左衛門の爲に少からぬ金子を融通したが、わざと茶屋酒に浸つて自から消費した様に見せかけた。その内に曾根崎新地紀の國屋小春といふ遊女と馴染を重ね、今宵も揚屋の河庄で、江戸屋太兵衛と身請の張合。小春は死ほど惚れた治兵衛様だが其の兄の粉屋孫右衛門や女房の



人形役割

紙屋治兵衛	吉田榮三
紀の國屋小春	吉田文五郎
河庄亭主	吉田兵次
河庄女房	桐竹政龜
粉屋孫右衛門	桐竹門造
太兵衛	桐竹光龜造松
善六	桐竹光龜造松
仲人居	吉田藤一
見物人	大ぜい

おさんに泣いて頼まれ、涙を吞んで治兵衛に愛相づかし、治兵衛は腹を立て、歸へる。小春は一人で死ぬ氣であつた。

紙治の宅では女房おさんは炬燵を温めて待つて居た。死ぬほど思ひつめた男と切れるといふ小春の心底を思ひやると、おさんは自分の義理が濟まなくなり、衣類身のまわりのものを入質しても小春を家に入れ、自分は子守なりとして三人仲よく暮したいと云ふ。治兵衛も女房の貞操に泣き、小春の實意もみえて今は板挟みである。所へ戀敵の太兵衛が小判を鼻にかけるのが癪にさわりつゝ、又物三昧に及んで人殺の罪を犯してしまふ。

繩身の生き恥をさらすよりはと、丁度死出の旅路の暇乞にきた小春と手に手を取つて大長寺を指して死に行く。

山科閑居の段

假名手本忠臣藏

山科閑居の段

前
豊澤 仙呂太夫
竹本 寛部太夫
鶴澤 寛治郎
後
竹本 織太夫
鶴澤 清二郎

人形役割

大星由良之助 吉田 榮三
加古川本藏 吉田 玉助
妻お石 吉田 小兵吉
大星力彌 桐竹 紋司
妻戸無瀬 桐竹 紋十郎
娘小浪 吉田 榮三郎
下女りん 吉田 玉徳

はる／＼と山科の大石閑居に辿りついた小浪母子は、大石の妻お石からきつぱりと力彌との縁談を断はられた。本藏の仕打を恨んでゐる。母子は生きて居られぬと、まづ母が娘の介錯、振上げた力の手の内を待てと止めたのは門前に尺八を吹く本藏であつた。本藏は、わざと悪口を吐いて力彌と立會ひ、我と我が脇腹へ槍の穂をつき刺して、由良之助へ身の言ひ譯、婿への引手物は師直方の繪圖面を贈つた。

此處に一同心も解けて目出度祝云。大星は江戸へ發する。

觀賞おぼえ

昭和十九年二月 日

八陣守護城

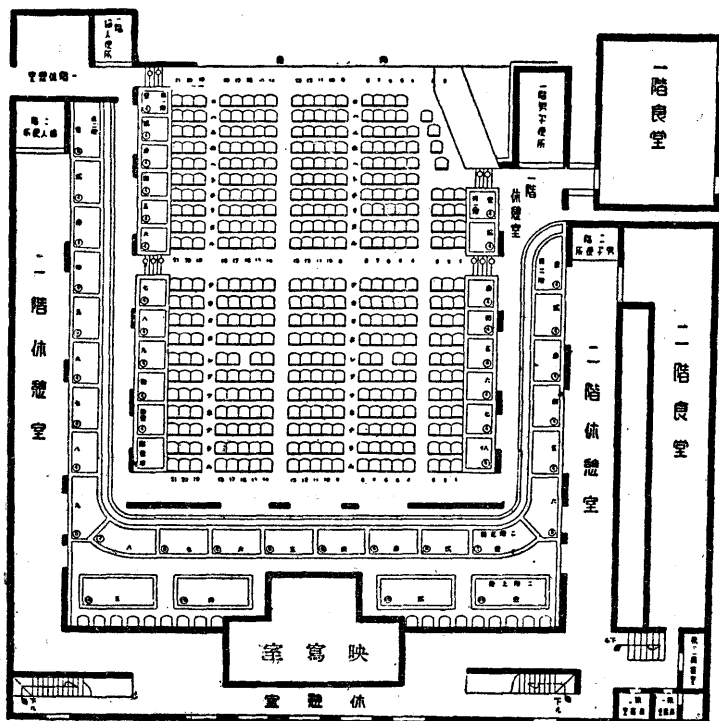
双蝶々曲輪日記

里景色双半紙

假名手本忠臣藏

紙屋治兵衛

内案御席場御座樂文



御、観、覧、席は大部分椅子席になつて居りますからお一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物が出來、またお出入が御自由です。

前、賣、切、符、壹等席のお切符は五日前から發賣致します。

また五日以後のお切符も壹等席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御場席をお申し込みになればお心のまゝにお好きな處が御自由にとれます。御用命のお節お呼出しの電話は南四七壹番で御座ります。

切、符、賣、場、右指定席切符は當日前賣とも正面西側本家入口にて取扱して居ります。

二等席・三等席切符は當日正面入口にて發賣致します。

文樂座小史 (昭和十八年調査)

○竹本座創立 (現今ヨリ二百五十九年以前)
貞享元年二月 (道頓堀西ノ芝居)

○文樂座發祥 (現今ヨリ約百五十年以前)
天明年間淡路ヨリ植村文樂軒大阪へ來ル

○第一次稻荷社内時代
文化八年ヨリ天保十三年ニ至ル

○西横堀新築地演時代
天保十四年ヨリ安政三年ニ至ル

○第二次稻荷社内時代
安政三年ヨリ明治四年ニ至ル

○松島千代崎橋時代
明治五年ヨリ明治十七年ニ至ル

○御靈神社内時代
明治十七年ヨリ明治四十二年ニ至ル

○松竹合名社繼承
明治四十二年三月植村家ヨリ繼承

○御靈文樂座燒失
大正十五年十一月二十九日

○隨時興行時代
昭和元年ヨリ昭和四年マデ道頓堀辨天座ヲ
始メ其他隨時興行

○四ツ橋文樂座創立
昭和四年十二月以來現在ニ至ル

開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を
賜り厚く御禮申上ます

當文樂座は 既に皆様御承知の通り我大阪に於ける郷土藝術、三位一體の人形淨瑠璃の日本唯一の公演場であります。

文樂座人形淨瑠璃は 常に大阪の誇りとする舞臺藝術のみならず我日本に於ける古典舞臺藝術の至寶として世界に誇るべきものであります。従つて開場毎にこの大使命が全う出来ますやう、皆様の御期待に背かね様、皆様に御満足して頂けるやうと一同不斷の努力を致して居りますが尙御氣付きの點は御客様の御聲として承りたく存じます。

貴重品は 各自にお持ち下さい。お場暗お立ちのときは御携帯願ひます。

お煙草は 一階、二階廊下に喫煙臺を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。お席では御遠慮下さい。

お食事は 西側、階下に大食堂と喫茶室が御座ります。

賣店は 一階西側休憩所に御座ります。

お化粧とお手洗 殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の二階と二階に御座ります。

場内にて 寫眞撮影は絕對にお断り致します。

御休憩の間は 一階西側に給茶處と二階西側に大休憩所の設備が御座ります。辨官御持参の御方は何卒御利用下さい。

出演者 病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから豫め御諒承願ひます。

松竹株式會社

文樂座

支配人

下村清次郎

電話南 三七八八番

昭和十八年 一月三十日印刷
昭和十九年 二月 一日發行

大坂市南區久左衛門町八番地
發行所 松竹株式會社大阪支店

大坂市南區久左衛門町八番地
松竹株式會社大阪支店內
圖帳 一鳥 江 鏡 也

一部 金二十錢

